

[平成12年度 普及に移す技術]

夏秋ぎくの秋施肥マルチ・春定植栽培							
〔要約〕春よりも土壌条件の良い秋に施肥マルチし、夏秋ぎくを春定植する栽培は、慣行の春施肥マルチ栽培よりも耕耘作業等への制約が少なく、かつ同等の切花長、切花重を確保できる。施肥マルチは11月に、黒マルチを用い、肥料は収穫期まで持続効果のある被覆燐硝安カリ424初期抑制100日型を利用する。							
福井県農業試験場・園芸バイテク部・花きグループ					契機	普及	
部会名	野菜・花き	専門	栽培	対象	花き類	分類	普及

[背景・ねらい]

北陸地域の露地ぎく栽培は主に水田転作で行っている。本県では、3月に9日間(過去30年間の福井市平均)の積雪があり、湿田地域では消雪後の圃場排水が悪く、耕耘、畦立て等の作業時期が限定され、作業の競合がおこる。そこで、比較的土壌の乾燥している秋のうちに施肥マルチを行うことで、春施肥と同等の切花品質を確保する栽培体系を確立する。

[成果の内容・特徴]

- 1 マルチ時期としては、中輪ぎくでは10月施肥マルチで切花重が減少し、11月では3月と同等となる。小ぎくでは10月、11月とも同等である。従って、11月が適する(図1)。
- 2 マルチの種類としては、秋の銀、白マルチは春の黒マルチより切花長、切花重が劣るが黒マルチは秋と春で同等となる。従って、黒マルチが適する(図2)。
- 3 肥料は、切花長、切花重が春マルチより優る被覆燐硝安加里424 初期抑制100日型が適する(図3)。被覆燐硝安加里424 初期抑制タイプは冬期の肥料成分の溶出が少なく、栽培期間の後半まで肥効が持続する(図4)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 十分に乾燥した状態の11月中に施肥、マルチを行う。
- 2 消雪が遅く春の作業適期が短い地域や、圃場排水が悪く春の作業条件が不良な地域に適する。
- 3 小ぎくを栽培する場合は10月に施肥マルチをすることが可能である。
- 4 畝が積雪などで沈圧するので春にマルチのたるみをなおす。

[具体的データ]

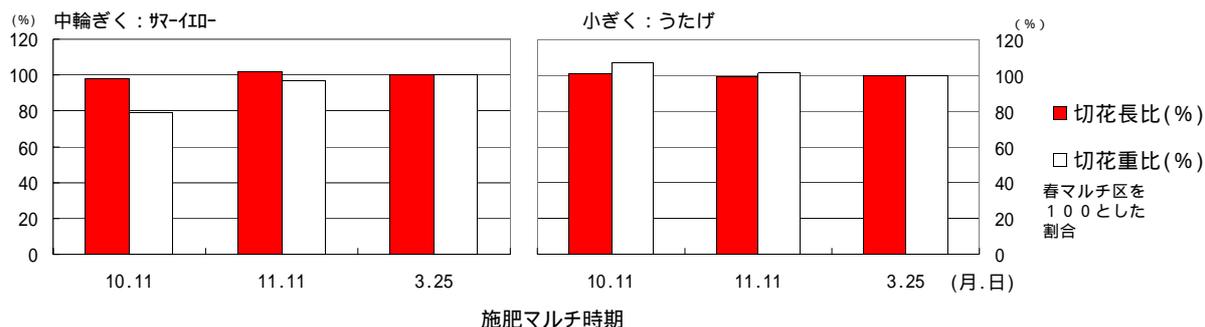


図1 マルチ時期の違いがきくの生育に及ぼす影響(1997年)

	挿し芽日 (月・日)	定植日 (月・日)	摘心日 (月・日)	平均開花日 (月・日)
サマ-イロ-	3.27	4.14	4.21	8.5 3本仕立
うたげ	4.7	4.21	4.30	7.24 3本仕立

施肥量: N:P:K = 30.2:25.9:30.2/10a, (有機被覆NK化成入り複合肥料755使用)

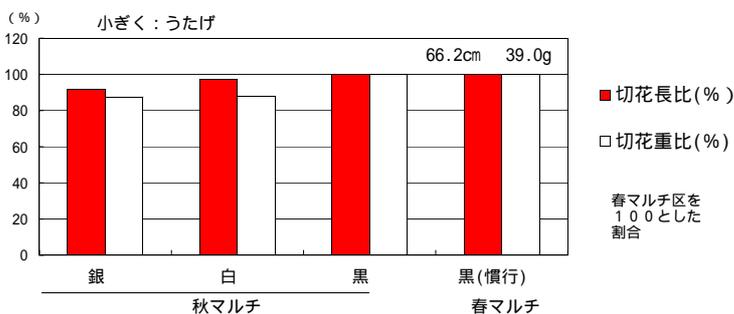


図2 マルチの種類が切花品質におよぼす影響(1998年)

挿し芽日: 3月31日, 定植日: 4月16日, 摘心日: 4月23日 3本仕立 平均開花日: 7月
秋マルチ: 11月24日に施肥、マルチ。春マルチ: 3月24日に施肥、マルチ。
施肥量: N:P:K = 30.2:25.9:30.2/10a, (有機被覆NK化成入り複合肥料755使用)

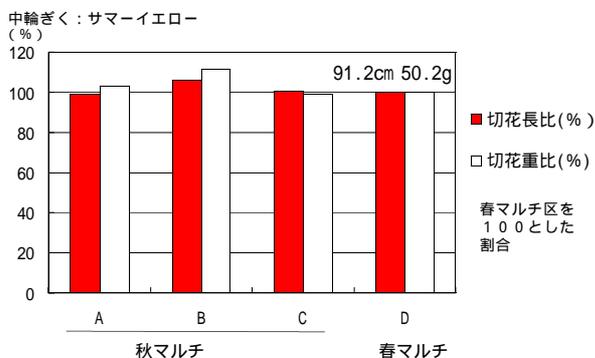


図3 秋施肥マルチの肥料の種類が切花品質におよぼす影響(1999年)

A: 被覆磷酸安加里424初期抑制140日区 B: 同左100日区
C: 有機被覆NK化成入り複合肥料755区
D: 有機被覆NK化成入り複合肥料755区
挿し芽日: 4月1日, 定植日: 4月18日, 摘心日: 4月27日 3本仕立
秋マルチ: 11月13日に施肥、マルチ。春マルチ: 3月25日に施肥、マルチ。
施肥量: N:P:K = 30.2:25.9:30.2/10a, 栽培指針に準拠
収穫期 7月21日 ~ 8月11日

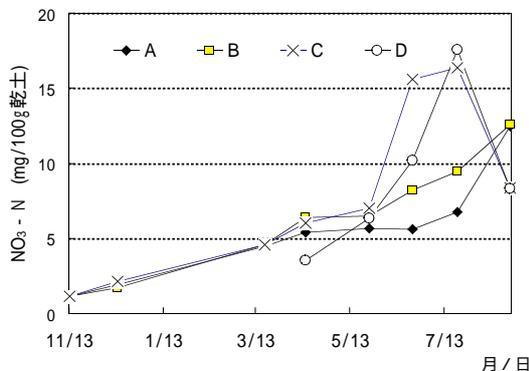


図4 肥料の種類によるマルチ土壌中の硝酸態窒素の変化

A ~ Dおよびマルチ施用時期等は図3に同じ

[その他]

研究課題名 : 福井型花き産地育成事業
予算区分 : 県単
研究期間 : 平成11年度(平成9~11年)
研究担当者 : 榎本博之, 土屋孝夫
発表論文等 : なし